

箴言1章23節 「注がれる知恵の御霊」

1A 知恵の御霊

1B 主ご自身

1C 預言されたキリスト イザヤ 11 章

2C イエスの宣教 マタイ 4 章、ヨハネ 8 章

2B 教会への賜物

1C キリスト者の成熟 1コリント 12 章

2C 執事における知恵 使徒 7 章

3C 使徒による教え エペソ 5 章

2A 聖霊のバプテスマの約束 ヨハネ 7 章

1B 主への立ち返り

2B 荒地での鉄砲水

3B 御言葉の教え ヨハネ 14 章、エレミヤ 31 章

本文

私たちの聖書通読の学びは、今日から箴言に入ります。午後に1章から3章までを読みますが、今朝は1章 23 節に目を留めたいと思います。「わたしの叱責に心を留めるなら、今すぐ、あなたがたにわたしの霊を注ぎ、あなたがたにわたしのことばを知らせよう。」

1A 知恵の御霊

私たちはこれまで、詩篇を読んできましたが、それは主への賛美に現われていたように、主への熱い思いと愛を言い表しているものした。そして箴言においては、その熱い思いを持って、この地上の生活の中に具体的に適用させていく知恵を教えています。「知恵」が箴言全体の主題となる言葉です。知恵といっても、世渡りのような処世術を教えるものではありません。主なる神を第一として生きるための知恵です。1 章 7 節に、「主を恐れることは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。」とあります。主を恐れ敬うことの中で、主の御霊が日常生活の中に押し流してくださるところの知恵です。

今日は、教会の暦において「ペンテコステ」を祝う日です。ペンテコステとは、五旬節とも呼ばれて、イスラエルの民が過越の祭りを過ごした後、七週間後つまり、五十日後に祝う祭りであります。ユダヤ人は、過越の祭りにエジプトから出てきたことを祝い、そして五十日後にシナイ山で主が律法を、モーセを通して与えられたことを祝います。また、小麦の収穫の時期にも入り、ダビデの祖先ルツが落穂拾いしたことを思い起こすため、ルツ記も読みます。

けれどもキリスト教会にとっては、これらの祭りが私たちの命と希望となったことを思い出します。

過越の祭りの日に私たちの主イエスは死なれました。そして三日後によみがえりました。ですから私たちは復活祭、イースターを七週前に祝いました。そしてよみがえられた主は、弟子たちに聖霊の約束をされました。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。(使徒 1:8)」事実、五旬節の日になって弟子たちに、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまりました。彼らが聖霊に満たされたのです。そして、そこに集まってきたユダヤ人たちにペテロがイエス・キリストを宣べ伝え、悔い改めて水のバプテスマを受けた弟子たちが三千人いたと書かれています。これが教会の始まりです。

聖霊の約束は、私たちに希望を与えます。イエス・キリストの福音、その生涯と力、その知恵と恵みは、聖書時代の当時のものではなく、聖霊によって、教会を通して私たちにも臨んでいるという希望です。そしてその御霊の働きは、知恵によって進んでいくことを今朝は見えています。

1B 主ご自身

私たちが生きている世界は、とても住みにくい世界となっています。確かに技術は発展し、この日本は多くの外国から来た人々は、「世界で最も便利な国」という評価をします。しかし、とても困難です。それは主を第一として生きるのに困難なのです。聖書の書かれていること、その知識を受け取っても、では生活の真ただ中でどのように適用させていけばよいのか分かりません。はっきりしているのは、何とかして主を第一としていき、この方を愛して、この方に愛されているという関わりと交わりから、私たちを引き離そうとする力が強く働いています。使徒パウロは、「終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。(2テモテ 3:1)」と言いました。

しかし、私たちの主イエス・キリストご自身が、その困難な生涯を歩まれました。神であられるのに人となられて、人々の間に住まれたからです。そこは罪の支配する世界であり、主がなされようとするのは、基本的に人々が反対するところです。しかし、主は聖霊の力によって、その知恵によって勝利していかれました。どんなことがあっても、父なる神にある愛の中に留まり、最後の最後まで父なる神の御心に従われました。この世の中にいながら、この世から分離し、聖なる歩みをされたのです。

そしてイエス様は、聖霊が上に臨むと力を受け、あなたがたはわたしの証人になると言われましたが(使徒 1:8)、この世において証しとなるのは、第一に、この世の中に生きないといけません。その神の証しの先駆者であるイエス様は、そのようになされました。とても人間的な方でした。近づきやすい方でした。そして実に、罪を悔い改める罪人や遊女、取税人などがイエス様のところにたくさん集まり、食事までされました。しかし、この世のものとなっていませんでした。

けれども第二に、証しをする者は、罪から離れ、聖くなければいけません。イエス様は罪から全く離れていた方です。私たちは聖く行きたいのであれば、この世そのものから離れたいと願います。「頭隠して尻隠さず」という諺のように、見て見ぬふりをしたいと思ってしまう。この世において

現実に起こっていることから目を離して、教会を一種のサロンのような場としたいと願います。自分の周りで起こっている大変なことから目を離した方が、心が痛まないし、楽です。しかし主は、聖霊によって私たちに命じられます。「わたしは、あなたがたをこの世に遣わす。(ヨハネ 20:21 参照)」と。この世にあるものから離れながら、なおかつこの世の只中で生きるように命じられているのです。その力を与えるのが聖霊であられ、世の中における聖なる御言葉の適用が「知恵」になります。

1C 預言されたキリスト イザヤ 11 章

キリストが聖霊に満たされ、その霊は知恵の霊であることは、約七百年前にすでに預言されていたことでした。イザヤが預言しました。「11:1-2 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。」キリストの上に主の御霊が留まります。その御霊の特徴は、癒しや奇蹟を行なう、手品師のようなそれではなく、知恵と悟り、はかりごとと能力、主を知る知識と主を恐れる霊なのです。

2C イエスの宣教 マタイ 4 章、ヨハネ 8 章

そしてイエス様は、水のバプテスマをヨハネから受けられました。その時に聖霊が鳩のようにイエス様の上に降られました。そしてイエス様は知恵と聖霊に満たされて宣教の働きを行なわれたのです。一つ、例を取り上げましょう。主がエルサレムで教えられていた時に、姦淫の場で捕えられた女が連れてこられました。そしてパリサイ人たちは、「モーセは律法の中で、こういう女を石打ちにするように命じています。ところで、あなたは何と言われますか。」と問い質しました。たしかに律法は姦淫を犯した者は、石打ちにしなければならないと命じています。

パリサイ人たちは、不道德な女がイエスに近づくのを知っていました。イエス様はその罪を赦すと宣言する方であることを知っていました。それで、この女の罪も赦すだろうと思ったのです。そこで、モーセの律法に明らかに違反することを語るなら、そこで彼が偽教師であると告発することができるのです。

しかしイエス様は、地面に何かを書いておられて、それでこう言われました。「あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」律法には、第一目撃者が、証人から先に石を投げることを命じています。そして、イエス様はこの女を石打ちで死刑にしなければいけないことを否定しておられません。確かに石打ちにしなければいけないでしょう、しかし、それをすることができるのは、自分自身が無罪であることです。同罪であれば、自分も石打ちにあわないといけません。彼らが一人一人その場を離れたのは、例えば情欲など、姦淫に関わる何らかの罪を犯していたからでしょう。だから、イエス様の恵み深さは律法に相反しなかったのです。いや律法の完成こそが、神の恵みの始まりです。この女も、パリサイ人たちも等しく罪人であり、石打ちを受けなければいけない存在です。それをご自身が身代わりに受けた、そこに恵みがあります。

このような反対を私たちが受けたらどうでしょうか？弟子たちがパリサイ人から問い詰められて、たじろいでしまうのと同じようになってしまわないでしょうか？ですから、神の知恵が必要なのです。そしてその知恵は聖霊が与えられるものであります。

2B 教会への賜物

1C キリスト者の成熟 1コリント 12 章

主は、教会において御霊による賜物を与えられました。コリントにある教会に対して、使徒パウロは初めに九つの賜物を列挙しました。その初めに来るのが「知恵のことば」です。「ある人には御霊によって知恵のことばが与えられ、ほかの人には同じ御霊にかなう知識のことばが与えられ、(1コリント 12:8)」とあります。なぜパウロが、コリントの人たちにこの教えをしたのか？それはコリントの人たちが大人げなかったからです。賜物が与えられたら何でもかんでも、他者や全体のことを気にかけないでそれを使っていたからです。異言で語り、教会に初めて来た人々は混乱してしまいました。

パウロは、12 章 7 節で「みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられている」と言いました。みな益となるための御霊の現われとして、初めにパウロが取り上げたのが知恵の言葉、そして次に知識の言葉なのです。そこでパウロは知恵をもって、コリントの中にある問題を整理していきました。愛がよりすぐれた道であり、異言については禁じてはいけないが、預言のほうですぐれている。預言であれば理解することができるのだから、教会の徳になる。異言は自分の徳を高めるがそれだけでは教会の徳にならないので、自分で祈るべきだという結論を出します。

自分のことだけでなく、隣人を見ていく、教会の全体を見ていくというのはキリストにあって成熟していることの現われです。それは知恵のなせる業なのです。そしてパウロはコリント第一 14 章の最後のところで、「神は混乱の神ではなく、平和の神だからです。(33 節)」と言いました。知恵の御霊が働かれた後の実は、平和であります。そこには神の平和と秩序が広がります。

2C 執事における知恵 使徒 7 章

この、知恵と御霊に満たされた人たちとして、使徒行伝に出てくる執事たちがいます。食事の配給のことで、ギリシヤ系のユダヤ人とヘブル系のユダヤ人の間に亀裂が走りました。前者のやもめがないがしろにされていると感じたからです。それで使徒たちは、執事七人を立てました。給仕をする人たちです。その人たちは単に給仕ができるだけではないのです、むしろ給仕という誰でもできそうな、具体的な奉仕に神の知恵が必要でした。使徒たちは言いました。「あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。」それで選ばれた人々のうち、一人がステパノでした。給仕をする中で聖霊に拠り頼まなければいけません。給仕だから、誰でもできるだろうということではないのです。まさにその配分で教会が分裂しそうになっていたのですから、知恵が必要なのです。

そしてステパノは、給仕をしているだけでなく福音を論じていました。「恵みと力と満ち、人々の間で、すばらしい不思議なわざとするしを行なっていた。」とあります(使徒 6:8)。さらに、反対者たちに対して、「彼が知恵と御霊によって語っていたので、それに対抗することができなかった。」とあります。彼は最後に殉教しました。しかし、その証しを迫害者サウロが見て、彼が後にパウロとなり、偉大な福音宣教師となっていきます。単なる言葉に終わらず、確実に人を変えさせる力となっていく。これも知恵のなせる業なのです。

3C 使徒による教え エペソ5章

そのパウロは、エペソにいる教会の人々にこのように書き送りました。「エペソ 5:15-16 そういわけですから、賢くない人のようにはなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。」賢い人、つまり知恵のある人のように歩みなさいと勧めています。なぜなら、悪い時代だからだと言っています。先ほど話した、困難な時代なのです。そこでパウロは、「機会を十分に生かして用いなさい」と言っています。ある人がこんな感じのことを言っていました。「この世における誘惑は、あからさまな悪を行なわせることではなく、大して重要ではないことに取り組ませていくこと。」恐いですね、主を第一にすべきなのに、第二のこと、第三のことに取り組ませて第一のことを忘れさせるということです。ですから絶えず努力して、主が第一になっているように機会を用いて生かしていかないとはいけません。さもないと、第二、第三のものを主ご自身よりも大事にしてしまうからです。

そして、この箇所を読み進めると、やはり「御霊に満たされなさい」という言葉が出てきます。「また、酒に酔ってはいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。(18節)」御霊によって、賢く生きるようにしていただけます。一番大切にしなければいけないことを一番していく、その知恵を与えてくれます。

2A 聖霊のバプテスマの約束 ヨハネ7章

では本文の箴言に戻ってください。「わたしの叱責に心を留めるなら、今すぐ、あなたがたにわたしの霊を注ぎ、あなたがたにわたしのことばを知らせよう。」であります。すばらしい約束がここにあります。叱責に心を留めるなら、今すぐにでも霊を注いでくださるというものなのです。

1B 主への立ち返り

ここでの叱責とは、主に立ち返ることです。あるいは主に立ち戻ると言ったらよいでしょう。悔い改めることです。知恵が叫んでいます。22節に「わきまえない者たち。あなたがたは、いつまで、わきまえないことを好むのか。あざける者は、いつまで、あざけりを楽しみ、愚かな者は、いつまで、知識を憎むのか。」と言っています。「わきまえない者」というのは、何でも信じてしまい、吟味や見分けを行なわない人のことです。そのまま言われたことを行なっている人です。「あざける者」とは、自分は知っていると思いこんでいる人で、大切なことに対して見下している人のことです。そして「愚かな者」という人は、言うことを聞かず心を堅くしているので、真理について無知になって

いる人のことです。わきまのない道、あざける道、愚かな道から、その道から外れて、わたしに聞きなさいと知恵が叫んでいます。

2B 荒地での鉄砲水

すると、「**わたしの霊を注ぐ**」と主が言われています。ここの「注ぐ」は、「濁流にあるような勢いで、ほとばしる」という意味の言葉が使われています。それで何か聞き覚えのある言葉を思い出せませんか？そうです、イエス様の聖霊の約束です。「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。(ヨハネ 7:37-38)」生ける水の川が、腹から流れ出るという言葉は、ここも鉄砲水のような激流のことを意味しています。イザヤ書に、荒地に水が流れ出るといふ、終わりの日の神の国の幻が書かれていますが、聖霊によって心の中で私たちに神が御霊の水の流れを起こしてくださいます。

どうでしょうか？みなさんは、知恵に欠けていると感じているでしょうか？もしかしたら、イエス様を信じているのに、生活がどのように変わっているのか分からないと感じているかもしれません。聖書の話を知っていることと、今の生活にどのように当てはめればよいか分からないと感じているかもしれません。いろいろな世の煩いがあって、その中に自分が沈みこもうとしている、いやもう思い煩いで縛られてしまっていると感じているかもしれません。遅くありません、主に立ち返ります。そうすれば、神が惜しみなく御霊を注いでくださるのです。

3B 御言葉の教え ヨハネ 14 章、エレミヤ 31 章

そして主は、「**あなたがたにわたしのことを知らせよう。**」と約束してくださっています。主が、愚かな道、あざける道、わきまのない道から立ち返ろうとする者に、すぐに御霊を注いでくださり、それで主の言葉を与えてくださるのです。その時に必要な、その時に思いもよらない考えで、「そうか、そのようにすれば良かったのですね！」と納得するような言葉を私たちにくださるのです。「ヨハネ 14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」

そしてイエス様の言葉を知り、思い起こすことができるだけでなく、それに従うことができるようにしてくださいます。それは、新しく心変えられたところの神の言葉だからです。御霊によって、石の心を取り除かれて、肉の心に新しく変えられているので、その神の命令に聞き従うことのできる力が与えられます。「わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書き記す。(エレミヤ 31:33)」と主は言われます。

では、聖霊の注ぎを求めましょう。まず、悔い改めてください。主の叱責に答えてください。そうすれば主は御霊を注いでくださいます。そして知恵の言葉が与えられます。